

# 楊貴妃と狐と熊野参詣ブームの始まり

— 中世の熊野信仰の正体に関する仮説2 —

蓑 虫

## はじめに

前回、『熊野』No. 157に『楊貴妃と熊野信仰』として「熊野信仰に楊貴妃信仰が隠されていること」その楊貴妃信仰が少なくとも、「907年の宇多法皇の熊野参詣にまで遡れる」ことを証明した。さらに、李白や杜甫、白居易が「楊貴妃を西王母に例えていた」ことを示し、その西王母に仕える聖獣、「三足鳥」（八咫鳥）『蟾蜍』（ゴトビキ）「九尾狐」（稲荷）が熊野にも見られることを示した。

今回も、編集者の好意をいただき、前回に引き続き、誌面を汚すことをお許しください。

そこで、今回は、その続きとして、この聖獣の中の「狐」（九尾狐・稲荷）に焦点をあてる。この「狐（稲荷）」の信仰の正体を明らかにすることによって、白河法皇の時代から始まる熊野参詣ブームが何故起こったのかを明らかにすると共に、熊野信仰が楊貴妃信仰であることのさらなる裏付けを行いたい。

## 一 熊野と稲荷信仰

狐（稲荷）が熊野信仰と密接に関わっていることは、最近、切目王子と稲荷の関係で、いくつかの論文に取り上げられている<sup>6)</sup>。また、切目王子の地域の人々が、ふるさとの歴史『切目王子のものがたり』という小冊子（絵本）を作っている。

これは、室町時代に書かれた『宝蔵絵詞』文安2年（1446）を元に描かれているものだ。

この切目王子のお話の内容を分析すると、とても興味深いものがあるが、論考の進行上、現時点では説明が出来ない。内容を簡単に述べると、そ乱神（崇り神）となった熊野権現の使いである切目王子が、伏見稲荷の信者だけは襲わないと約束するというもので、熊野権現が稲荷や狐と、深い関係を持っていることを表しているお話だと考えられる。

残念ながら、現在、熊野と稲荷の関係で注目されているのは、このお話だけで、一般的には、熊野と狐（稲荷）の関係は知られていないと言ってよい。

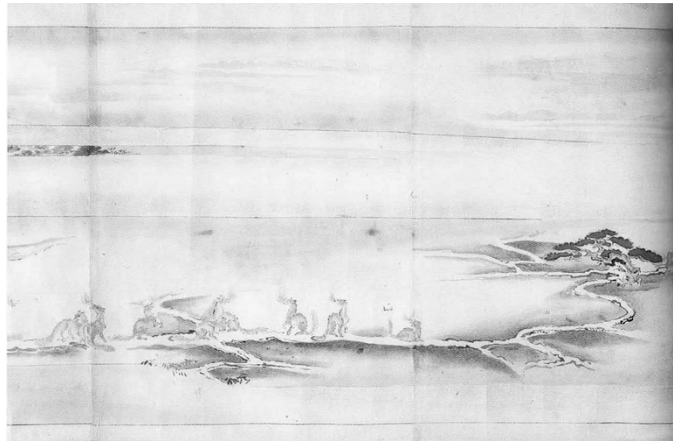
そこで、本論に入る前に、狐（稲荷）信仰と熊野信仰が深く関わりを持っていたことを示す必要があるだろう。

熊野街道を京都から辿っていくと、大阪阿倍野で安倍晴明の母の白狐、葛の葉伝説で知られる信太森、阿倍野王子神社に出る。和歌山に入ると有田に日本最古の稲荷をうたう糸我

稲荷・糸我王子がある。田辺には空海の伏見稲荷灌頂伝説に絡む伊作田稲荷があり、中辺路に入ると、現在は明治の合祀令のためなくなっているが、吉田兼俱の二十二社註式にも登場する稲葉根王子の稲葉根稲荷がある。そして、前回の論考にも示したが、もちろん、新宮阿須賀神社の稲荷神、奥熊野玉置神社の三狐神の存在を忘れてはならない。

「伊勢屋、稲荷に犬の糞」という諺があるように、稲荷社はどこにでもあるものとされている。熊野古道沿に稲荷社がある事も当然と考えるかもしれない。しかし、稲荷信仰は、江戸時代に商売繁盛の神として急速に広まったとされる。先にあげた稲荷社は、起源がわからないほど、古い伝承を持つものばかりなのだ。

この江戸の稲荷信仰の大流行の先鞭となったのは東京北区の王子稲荷・王子神社であるが、この王子神社は、熊野新宮の浜王子から若一王子を灌頂したものと伝わる。東京北区王子の紙の博物館には、この北区の王子神社の縁起を絵巻にした東京都北区指定有形文化財となっている『若一王子縁起』絵巻がある。これは、寛永18年狩野尚信が、幕府の依頼を受けて制作し徳川家光に献上した物の写しで、ここには、熊野権現の降臨の姿や、八咫鳥、狐火を灯す狐達の絵が描かれている。(画像①)これは、熊野権現と狐(稲荷)が密接な関係を持って考えられていたことを示す証拠の一つとなるだろう。



画像① 『若一王子縁起』絵巻より

「毎年十二月晦日の夜、諸方の狐、火燈して来る、関東三十三ヶ国の稲荷の惣つかさなり、」

そして、この王子稲荷こそが、関東八洲の稲荷(狐)を束ねていると言われていたのである。熊野信仰と稲荷信仰が結びついてきたことを示す根拠はこれだけではない。

中世の熊野参詣記、例えば、『為房卿記』『中右記』『後鳥羽院熊野御幸記』『修明門院熊野御幸記』など、様々な記録は、熊野御幸から帰ってきた貴族達に、まず、伏見稲荷を参詣する風習があった事を伝えている。

この中から、熊野参詣ブーム初期の永保元年(1081)十月十二日の『為房卿記』の熊野参詣記録から、一部を記述しよう。ここには、「丙寅、戌刻、参稲荷社奉幣是例事也。」とこの時、すでに、熊野参詣の後には、稲荷参詣をするのが、慣わしであった事が記されている。実際、その前年の承暦4年(1080)十二月二六日の源俊房の『水左記』にも「今夜

左大将熊野還向、明日被詣稻荷」と熊野参詣から帰ってきた藤原師通が稲荷参詣を行った事が記録されている。

このように、熊野と稲荷(狐)が、平安末期の熊野参詣ブームのその始めから密接な関係を持って考えられていた事は間違いない。現在の熊野で狐(稲荷)の影を感じる事はないのは、前回の楊貴妃信仰と同じ理由で、熊野においては、狐(稲荷)信仰を隠す必要があったからではないかと筆者は考えている。

## 二 九尾の狐・玉藻前の伝説

九尾の狐と言えば、前回の論考に書いたように、西王母に仕える霊獣であったが、日本では、玉藻前の伝説を思い起こす方が多いであろう。

玉藻前は、熊野を崇敬したことで知られる鳥羽法皇の寵姫であったとされる。しかし、その実体は九尾の狐であり、その前身は、中国に於いて帝を骨抜きにし国を滅ぼした殷の妲己であり、周の褒姒であった。(画像②)

もちろん、これは、架空の作り話であるが、このように、九尾の狐は傾国の美女に化けるとされている。そして、傾国の美女と言え、誰もが楊貴妃を想像するであろう。

筆者は、前回の論考で、「柳のおりゅう」の伝説が、後白河法皇の楊貴妃信仰を現すものであったことを示したが、この



「玉藻前の伝説」も鳥羽法皇の楊貴妃信仰を現す物語であると考えられる。しかし、玉藻前の伝説に、楊貴妃は登場しない。

代わりに、若藻という少女が登場する。吉備真備の乗る船で日本に連れられて来た此の唐の国の少女が、後に、玉藻前を名乗る事になるのだ。

吉備真備(695~775)が生きていた時代は、楊貴妃の生きていたとされる時代(719~756)と完全に重なる。当然、この時代の妲己や褒姒に匹敵する美女と言え、楊貴妃であろう。それが、なぜ、物語は名も無い少女を九尾の狐として持ってきたのであろうか? 九尾の狐とするなら楊貴妃の方が相応しいではないか?

筆者は確認出来ないが、岐阜女子大学の准教授であった故・岡部明日香氏の報告によれば、台北故宫博物院所蔵の室町時代の写本の『歌行詩』には、楊貴妃が九尾の狐の化身

だと書かれているという。

現在、楊貴妃が、九尾の狐とされているのは、極めて不自然な事ではないだろうか。

### 三 杜甫の記録

詩聖として知られる杜甫は楊貴妃と同時代人であった。

「はじめに」でも述べたように、杜甫は、楊貴妃を西王母に例え、楊貴妃に憧れるような詩も残しているが、次のような詩も書き残している。

#### 杜甫 北征（一部）

憶昨狼狽初	憶う昨狼狽の初め
事與古先別	事は古先と別なり
奸臣竟菹醢	奸臣竟に菹醢せられ
同惡隨蕩析	同惡 随つて蕩析す
不聞夏殷衰	聞かず 夏殷の衰えしとき
中自誅褒姒	中の自ら褒姒を誅せしを
周漢獲再興	周漢 再興するを獲しは
宣光果明哲	宣光果たして明哲なればなり
桓桓陳將軍	桓桓たり陳將軍
仗鉞奮忠烈	鉞に仗りて忠烈を奮う

微爾人盡非 爾微りせば人は尽く非ならん

於今國猶活 今に於いて國は猶お活く

原文 維基文庫 北征より

<https://zh.wikisource.org/wiki/北征>

これは、北征の詩のうち、近衛隊が蜂起し楊国忠を惨殺した馬嵬の変とそこで起った楊貴妃の処刑の場面をうたった箇所である。

この詩の中で、杜甫は、楊貴妃を「褒姒」と「褒姒・妲己」に例えている。ここから、楊貴妃には死んだとされて間もない頃に、褒姒や妲己と同一視する見方があった事がわかる。

### 四 沈既濟の任氏伝

『任氏伝』と言う狐の美女の物語がある。書いたのは、沈既濟という史学者で、楊貴妃の亡くなった原因となった安史の乱の時代に少年期を過ごしたと考えられている人物である。簡単に『任氏伝』の内容を紹介する。

物語の舞台は、楊貴妃の夫である玄宗の時代の末期、天宝九年（750）の長安の都である。そこに鄭六という貧しい青年が住んでいた。鄭六は、ある時、街を歩いている

美しい女性を見かける。鄭六は、心惹かれて、自分の乗っていた驢馬で家まで送り届けるのだが、その美しい女性（任氏）は、お礼にと、館に引き入れ、鄭六を手厚く接待する。

任氏の美しさからも夢見心地で帰った鄭六が、もう一度、任氏に会いたいと任氏の館に出かけると、そこには家も何もなく、地元の人から、ここには狐が棲んでいて、時々、男を引き摺り込んで騙すのだと話を聞く。

けれど、鄭六は、任氏の事を忘れられずにいる。

それから、しばらくたった頃、鄭六は、再び、街で任氏の姿を見かける。逃げようとする任氏の手を捕まえ、鄭六は、心を込めて求愛する。その心に討たれた任氏は、それから、鄭六に尽すようになる。

鄭六は人生に張りが出来て、仕事も順調になり、任氏の不思議な力の手助けもあって出世し、武官に任命され、金城県に外向する事になる。

鄭六は任氏を伴って出かけるが、その途中、馬嵬の駅まで来た時であった。お狩場の役人が訓練していた獵犬が飛び出してくる。任氏はびっくりして、狐の姿に戻って逃げ出す。鄭六はあわてて追いかけるが、追いついた時には、狐は獵犬にズタズタに引き裂かれてしまった後だった。鄭六に残されたのは、蟬の抜け殻のような衣服と、地

べたに転がった首環だけであった。

このお話の狐の美女、任氏は、楊貴妃をモデルにしているであろう。楊貴妃の亡くなったとされる年代は、天宝十五年（756）で、『任氏伝』の舞台は楊貴妃の生きていた時代である。楊貴妃はいうまでもなく絶世の美女だが、任氏も同じ絶世の美女だ。そして、馬嵬で亡くなったとされる点も同じである。そして、任氏は衣装と首環しか残さなかったが、楊貴妃も、玄宗が、改葬しようと墓を掘り起こさせた時に、そこには、香囊だけしかなかったと旧唐書や新唐書の記録にある。

この物語から、楊貴妃には死んだとされてから間もない頃に狐だという噂があったことが想像される。

## 五 白居易の書いた狐の詩

楊貴妃の伝記である『長恨歌』を書いた白居易も、任氏を主人公とした『任氏行』という詩を書いていた。沈既済の方が歳上であり、『任氏伝』の方が先に発表されていたと考えられるので、白居易は、『任氏伝』をリスペクトして『任氏行』を書いたのであろう。

『任氏行』は残念ながら、『白氏文集』にも収録されておら

ず、その内容は断片的にしか伝わっていない。<sup>(4)</sup>  
白居易には、別に、狐の美女を主人公とした『古冢狐』と  
いう詩がある。これを紹介する。

#### 白居易 古冢狐

古冢狐，妖且老	古塚の狐 妖にして且老ゆ
化爲婦人顔色好	化して婦人と為れば顔色好し
頭變雲鬢面變妝	頭を雲鬢に変じ面を粧に変ず
大尾曳作長紅裳	大尾を曳きて長き紅裳を作る
徐徐行傍荒村路	徐徐に行く荒村傍らの路
日欲暮時人靜處	日暮れんと欲する時、人静かなる処
或歌或舞或悲啼	或いは歌い或いは舞い或いは悲しげに啼く
翠眉不舉花顔低	翠眉を挙げず花顔を低す
忽然一笑千萬態	忽然一笑すれば千万の態
見者十人八九迷	見る者十人、八九は迷う
假色迷人猶若是	仮の色、人を迷わす、なおかくのごとし
真色迷人應過此	真の色、人を迷わす、まさに此に過ぐべし
彼真此假俱迷人	彼の真と此の仮と俱に人を迷わす
人心惡假貴重真	人の心は仮を悪く真を貴重とす
狐假女妖害猶淺	狐の仮の女妖の害はなお浅し
一朝一夕迷人眼	一朝一夕、人の眼を迷わす
女爲狐媚害即深	女が狐媚を為す害は即ち深く

日長月増溺人心 日に長じ月に増して人心を溺す  
何況褒姒之色善蠱惑 何ぞいわんや、褒姒の色善く蠱惑して  
能喪人家覆人國 よく人家を喪わせ、人國を覆さん  
君看爲害淺深間 君看よ、害を為す浅深の間  
豈將假色同真色 豈、仮の色をもって真の色と同じくせん

原文 維基文庫 古冢狐より

<https://zh.wikisource.org/wiki/古冢狐>

白居易は、この詩の中で、狐の美女を褒姒（褒姒・妲己）と  
比べている。筆者は、この詩は、楊貴妃のことを詠った詩だ  
と考える。白居易が『任氏行』を書き、さらに、北征の詩の  
中で、楊貴妃を褒姒と同一視していた杜甫の後継者を自負し  
ていた事、さらに楊貴妃が国を滅ぼす傾国のイメージを抱か  
れていた事を考えるならば、この詩の中の狐の美女にも、楊  
貴妃のイメージが投影されていると考えるべきであろう。

#### 六 大江匡房の狐媚記

白河法皇のブレインであった大江匡房が『狐媚記』という  
書を書き、その文末に「九尾の狐」のことを書いている。白  
河法皇は、鳥羽法皇の祖父であるから、この記録は、『玉藻前』  
騒動以前の九尾の狐の記録である。

この『狐媚記』から抜き書きをする。

大江匡房 狐媚記（抜粋）

嗟呼、狐媚變異 ああ、狐媚の怪異は  
多載史籍 多数の史籍の中に載っている。

殷之姐己為九尾狐 殷の姐己は、九尾の狐となり

任氏為人妻 任氏として、人妻となった。

到於馬嵬、為犬被獲 馬嵬において、犬によって獲えられた。

惑破鄭生業 鄭を惑わし生業を破り、

或讀古冢書 或は、古塚の書を読む。

或為紫衣公 或は、紫衣公となった、

到縣許其女屍 県（地方）に到る時に、この女の屍を許した。

事在倜儻 事は、周到にあり、

未必信伏 未だ、必ずしも信伏せず

今於我朝 今、この我が朝において、

正見其妖 正にこの妖を見る。

雖及季葉 すえの世といえども、

恠異如古 怪異、古の如し

偉哉 あやしきかな

原文 古代政治・社会思想 岩波書店より

正直、読めても意味は判り難い。しかし、先程までの話の知識をベースとして考えるなら、ある程度、意味を掴むこと

が出来るだろう。

「殷の姐己は、九尾の狐となり」

これは、玉藻前の伝説を考えると当たり前の事のようにであるが、一般的に姐己が九尾の狐とされるのは、明時代の傳奇小説『封神演義』からだとされている。この『狐媚記』が記述された時代は、これより早い。前回の筆者の論考の中でも参考にした『千字文』には、「弔民伐罪 周發殷湯」の項の李暹の著とされる注釈に姐己が九尾の狐であった話が載せられている。この事については、後世に話が付け加えられたものだという説があるが、もし、本当に李暹が姐己は九尾の狐であった話を書いていたのであれば、李暹は、中国の南北朝時代の人物であり、『千字文』が奈良時代には、すでに日本に入ってきていたのは明らかであるから、大江匡房は、この『千字文』を読んで「殷の姐己は、九尾の狐」と書いたのかもしれない。（もし、後世に『千字文』の注釈に姐己が九尾の狐であった話が増えられたのであれば、筆者は、大江匡房が、姐己が九尾の狐だという話を言い出した可能性を考える。）

「任氏として、人妻となった。」

これは、言うまでもなく沈既済の『任氏伝』の事だ。あるいは、大江匡房が見たのは、白居易の『任氏行』であったかもしれない。

「馬嵬において、犬によって獲えられた。」

これも『任氏伝』からだ、楊貴妃も、また、馬嵬において、命を失ったとされるのは、既述の通りである。

「鄭を惑わし生業を破り」

鄭は、『任氏伝』の主人公「鄭六」の事であろう。しかし、意味がわからない。『任氏伝』を読めば一目瞭然だが、「任氏」は、心から「鄭」に尽くし、「鄭」もそれに応えて頑張るのである。決して、惑わしたり、怠惰な生き方をさせるといったのではない。別の人物の事を言っているのではないかと想像させる。

「或は、古塚の書を読む。」

これは、白居易の『古冢狐』を意識しているであろう。この『古冢狐』の詩が楊貴妃を意識して書いているのではないかと？と言う事は、先に述べた通りである。

「或は、紫衣公となって」

これも『任氏伝』だと解釈すると意味がわからない。「紫衣」はもともと、高貴な人が着る着物の意味だ。『任氏伝』の主人公「鄭六」の出世は総監使止まりである。これは、とても紫衣公とは言えないだろう。明らかに、この文章は、『任氏伝』を離れ、別の人物の話語っている。

「県（地方）に到る時に、この女の屍を許した。」

これも、『任氏伝』の「鄭六」の事を言っているととれるが、それより、楊貴妃の夫である「玄宗」の事を思い起こす。

玄宗は、安祿山の軍に追われて、長安の都を逃げ出し、蜀へ向かう途中に、警護をしていた近衛兵たちが暴動を起こし、それを治めるために、楊貴妃を殺す事を許さざるを得なくなるのである。

「事は、周到にあり」

その裏には、周到に隠された秘密があり、

「未だ、必ずしも信伏せず」

狐の美女は、まだ、死んでおらず、

「今、この我が朝において、正にこの妖を見る。」

日本に渡ってきて、今、この京の都を騒がせている。

このように大江匡房は述べていると解釈できる。

大江匡房は、『狐媚記』で、九尾の狐や任氏の話をしながら、実は、楊貴妃の生存・渡来説を語っていると想像されるのだ。

この解説の最初の方で、『狐媚記』が、妲己を九尾の狐と書いた最初の文である可能性を書いたが、仮に、この『狐媚記』が、妲己を九尾の狐とした最初の文だとすれば、大江匡房が「妲己を九尾の狐」としたのは、楊貴妃が原因であったかもしれない。

妲己は殷の時代の悪女として有名だが、妲己は、その始めから九尾の狐と例えられていたのではない。九尾の狐とされるのは、かなり後代になってからであろう。

何故なら、前回の論考に写真で示したように、殷の時代より後の漢の時代には、九尾の狐は、西王母の化身として描かれており、悪獣ではなく、聖獣のイメージで捉えられていることが明らかであるからだ。

では、何故、妲己が九尾の狐とされるようになったのだろうか？

杜甫の詩で、楊貴妃が妲己に例えられていることは先に示した。さらに楊貴妃は西王母と同一視されていた。そして、狐のイメージも持たれていた。即ち、楊貴妃には、始めから九尾の狐のイメージがあったのだ。

こう考えるなら、妲己が九尾の狐とされるのは、「妲己＝楊貴妃＝九尾の狐」という方程式の結果であったのかもしれない。

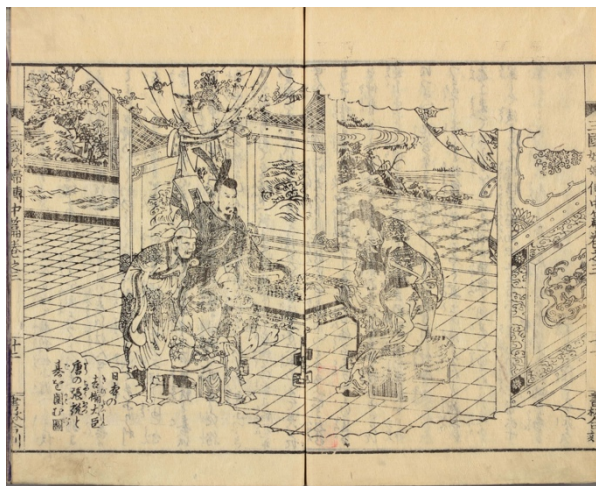
どうであったにせよ、先に述べたように、大江匡房は、「玉藻前」に取り憑かれたとする鳥羽院の前時代の人物であるから、「玉藻前」の伝承自体は、この大江匡房の『狐媚記』、即ち、楊貴妃の渡來說によって生まれた物語であるのは明らかであろう。

大江匡房が、楊貴妃の事を調べ、楊貴妃に並々ならぬ興味を抱いていた事は、大江匡房の書いた願文に楊貴妃の故事が多用されている事でもわかる。この事については、帝塚山大学の王晓平氏が、『願文にひそむ俗文学——江都督納言願文集』

を中心として』の中で「注目すべきは、楊貴妃の故事が、匡房の願文に頻用される事である。」と指摘している。

## 七 吉備入唐伝説

さて、玉藻前が若藻として、吉備真備に連れられ唐の国から渡ってきた話は、江戸時代の与力である高井蘭山の書いた『絵本三国妖婦伝』を筆頭に多くの話に書かれるが、この『絵本



画像③ 『絵本三国妖婦伝』より  
「日本の吉備大臣 唐の張説と碁を圍む圖」

三国妖婦伝』を読めば、この吉備真備が若藻を連れてくる前段階の話として、吉備真備が阿倍仲麻呂の霊に助けられ、唐の国の囲碁の名人と勝負したり、『野馬台詩』を読むといった物語が記されているのがわかる。(画像③)

この物語とよく似た話が室町時代の末期に書かれた現存する最古の安倍晴明の伝記である『篋篋袖裡傳』



画像④ 歌川国貞画  
『玄東妻隆昌女』『安部の仲磨の霊』

にも書かれる。ここにも、吉備真備が阿倍仲麻呂の霊に助けられる話、唐の国の囲碁の名人との勝負の話、『野馬台詩』を読む話、吉備真備の船を追って日本に渡る子供の話、玉藻前の話が載せられる。江戸時代に書かれた『安倍仲磨生死流傳輪廻物語』では、若藻の代わりに唐の国の囲碁の名人の妻である隆昌女が登場する。(画像④)この女性が、吉備真備に連れられ、後に晴明の母である白狐になったとするのである。筆者は、この狐の美女を楊貴妃の事だとみる。

『絵本三国妖婦伝』も『篋篋袖裡傳』も『安倍仲磨生死流傳輪廻物語』も近代に作られた物語で、そこから史実を探ろうなど考えるにも値しない行為かもしれない。

しかし、これとよく似た話が、現在、ボストン美術館にある『吉備大臣入唐絵巻』

に描かれている(画像⑤)。

この『吉備大臣入唐絵巻』は、前回の論文で紹介した藤原信西が奉納した『長恨歌絵巻』と同じように、後白河法皇のサロンで作製されたと推定されている。そうだとすれば、この吉備伝説の話の原形は、熊野参詣ブームの只中の平安時代末期に遡ることになる。

さらに、この『吉備大臣入唐絵巻』のもとになったと考えられる話が、大江匡房が語り、それを藤原信西の父である藤原実兼が書き留めたものと伝わる『江談抄』の第三の二話『吉備入唐の間の事』に書かれる。

ここには、阿倍仲麻呂の霊や囲碁勝負、『野馬台詩』を読むといった話が載せられる。

しかし、玉藻や隆昌女のような美女や狐は登場しない。



画像⑤ 『吉備大臣入唐絵巻』より  
「吉備大臣、唐の名人との囲碁勝負の場面」

そうであるなら、美女や狐の話は、後世になって吉備伝説に付け加えられたものだと考えられるかもしれないが、先に『狐媚記』の所で示したように、大江匡房は、楊貴妃に興味を持ち、日本に渡った九尾の狐の物語を書いていたのだ。

『江談抄』は、先にも書いたとおり、大江匡房が語り藤原実兼がこれを書き留めたものだが、後に改竄された形跡がある。

例えば、『江談抄』の第三の三話の『阿倍仲磨歌を読む事』だが、これは、永久四年(1116)の事件を話題としている。大江匡房は天永二年(1111)、藤原実兼は天永三年(1112)に没していて、永久四年(1116)の事件を書く事が出来たわけではない。

筆者は、美女や狐の登場する物語こそ、大江匡房が語ったオリジナルの吉備伝説を伝えているのではないかと想像する。藤原実兼は『吉備入唐の間の事』の最後に次のように書いている。

大江匡房談 藤原実兼筆

吉備入唐の間の事(抜粋)

原文

江師云、此事我慥委ハ難無見書、故孝親朝臣之従先祖語伝之由被語也。又非無其謂。太略粗書ニモ有所見歟。我朝高名只在吉備大臣。文選囿碁野馬台、此大臣徳也。

新日本古典文学大系

江談抄 中外抄 富家語 岩波書店より

訳

江師(大江匡房)は云う。「此事を、私は、たしかに詳しくは書に見る事は出来なかつた。しかし、故孝親朝臣(大江匡房の外祖父・橘孝親)の先祖が語り伝えたものゆえ、これを語るのだ。また、その言われがないわけではない。大略は、書にも見られる所がある。我が朝の高名は、ただ、吉備大臣に在る。文選、囿碁、野馬台……これは大臣の徳である。」

すなわち、大江匡房は、この話を事実ではないとしても、真実を含んでいると語っていたというのだ。

大江匡房は、この時代の最高知能と言ってよい。その大江匡房がこのように言っている事を馬鹿げた作り話だと無視していいというものではないだろう。

阿倍仲麻呂は、楊貴妃の史歴上の死である馬嵬事変が起こった756年、日本では、死んだものと見なされていた。

即ち、筆者は、この吉備伝説を、吉備真備と、幽鬼となつた(死んだと考えられていた)阿倍仲麻呂が、楊貴妃を亡命させた物語だと考えるのである。

## 八 阿倍仲麻呂の帰朝説

阿倍仲麻呂が、楊貴妃を亡命させたという話について説明しようとするには、『阿倍仲麻呂の帰朝説』について触れなくてはならない。本来、この事だけで一つの論文を書く必要があるほどの話なのだが、簡単に説明してみよう。

先ほど名を挙げた『江談抄』の第三の三話、『阿倍仲麿歌を讀む事』だが、ここには、阿倍仲麻呂の詠んだとされる『天の原、振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも』の詩を引き合いに出して、いったい、この詩は唐で詠まれたものなのかと訝しむ人物を登場させている。また、今昔物語『安倍仲麿、於唐読和歌語第四十四』には、「此れは、仲丸、此国に返て語けるを聞て語り伝へたるとや」と、阿倍仲麻呂が日本に帰ってきたと書かれている。このように、阿倍仲麻呂の帰朝説は、古来から存在しているのである。

史書の記録によれば、753年の終わり、阿倍仲麻呂は、日本の遣唐使節団の唐側送使長として吉備真備等と共に、日本に帰ろうとしたという。

しかし、第2船の大使古麻呂や鑑真、第3船の吉備真備、第4船が日本に到着したのに対して、阿倍仲麻呂の乗る第1船は、遣唐大使の藤原清河と共に遭難し行方不明になってしまふ。日本では、阿倍仲麻呂と藤原清河の生存が絶望視され

るが、実は、彼らは生きていて、長安の都に戻ってくるのだ。そして、その後、日本に帰ってくる事はなかったとされている。

しかし、彼らが生きて、長安に戻って来たなら、本来、その後、どのような行動を取るべきであっただろうか？

前回の734年の遣唐使団の第2船の中臣名代は、阿倍仲麻呂と藤原清河と同じように嵐のため唐の国に戻され、船を修理した後、735年に再び出帆して日本に帰っている。第3船の平群広成は、安南の崑崙国にまで流され、その後、阿倍仲麻呂の斡旋によって、739年に渤海經由で日本に帰朝している。これを考えるなら、阿倍仲麻呂と藤原清河も、長安の都に戻った後は、何としても、日本に帰ってくる事を目指すのが当然であっただろう。

しかし、彼らは帰って来なかったとされる。その理由について「続日本紀」宝龜十年(778)2月4日藤原清河の弔伝には、「廻日遭逆風漂著唐国南辺驩州。時遇土人。及合船被害。清河僅以身免。遂留唐国。不得帰朝。」とある。

すなわち、清河達は、逆風で唐の国の南辺の驩州かんしゅうに流され、そこで、土民に襲われ、船は壊されて、清河は、この時、身一つで脱出した。そして、そのために帰る事が出来なかったと記されている。

一方、「日本後記(日本紀略)」延暦二十二年(803)3月6

日の記事には、「漂泊安南、屬祿山構逆、群盜蜂起、而夷撩放横、劫殺衆類、同舟遇害者一百七十餘人、僅遺十餘人」とある。

すなわち、この記事では、安祿山の構逆（安史の乱）のために、盜賊が横行し、原住民の抑えが効かなくなり、阿倍仲麻呂と藤原清河の乗った船の乗組員170人余りが殺され、生き残ったのは、僅か十数人であったと書かれているわけである。

そして、この記事が、現在の定説となっている。しかし、筆者は、このことについて、非常に違和感を覚える。

まず、続日本紀の記事によれば、阿倍仲麻呂と藤原清河の乗った船は、安南まで流されたものの、そこは、崑崙国ではなく、唐の国内の驩州かんしゅうであったわけだ。そこには、唐朝の支所と言うべき、安南都護府が置かれていた。何故、阿倍仲麻呂は安南都護府に助けを求めず、安南都護府は、唐朝の高級官僚であった阿倍仲麻呂を庇護しなかったのだろうか？身一つで逃げ出したり、船を壊されるなどという事が本当に起こりえたのだろうか？たとえ、記録のとおり、本当に船を壊されたのだとしても、壊したのは、唐の領民であったわけで、唐朝政府には、代わりの船を用意する責任が出てきただろう。だとすれば、船を壊されたので日本に帰れなかったという続日本紀の説明は成り立たない。

日本後記（日本紀略）は、この私の疑問に答えるかのように、これを安祿山の構逆があったためだとするが、これは、ますます疑問である。阿倍仲麻呂研究の第一人者である杉本直治郎氏は、755年の6月に日本の遣使、すなわち、藤原清河と見られる人物が玄宗皇帝に拝謁した記録を見つけ、755年の6月には、阿倍仲麻呂と藤原清河が長安の都に戻っていたと推定しており、これが現在の定説になっている。

安祿山が反乱の兵をあげたのは、755年の11月である。すなわち、755年の6月には、唐の国は、まだ平穏であったのだ。一部には、この頃には、すでに、安祿山が不穏な動きをしていて、戦乱が起る事が予想されていたという意見もあるが、当時、安祿山を危険視していたのは、安祿山の政敵であった楊国忠であって、玄宗皇帝は、安祿山が謀反を起すなど信じてはいなかった。楊国忠にしても、讒言によって安祿山を追いおとす事が目的であって、まさか、本当に安祿山が拳兵するとは思ってもいなかったに違いない。

755年の6月に藤原清河が玄宗皇帝に拝謁した目的は、今までの経過報告と共に、再びの唐の国から日本への出航許可を得るためであっただろう。そして、その許可がおりていたとすれば、756年の6月、楊貴妃が馬嵬の地で姿を隠したその時には、日本への出航の準備が整っていたのではなかったのだろうか？

ただし、その船で藤原清河が帰って来なかったことは確かである。藤原清河は日本に帰ってこず、その後、何度も、日本の朝廷は、藤原清河を迎える船を唐の国に送り込んでいる。

藤原清河は、何故、日本に帰って来なかっただろうか？ 遭難して、臆病風に吹かれたためだろうか？ それとも、楊貴妃を連れて行く事が、国際問題になる事を恐れて、乗船をボイコットしたのだろうか？ あるいは、楊貴妃を日本の朝廷に預けるために、唐側から、その身代わりの人質として残る事を要求されたのだろうか？

とにかく、安倍仲麻呂と楊貴妃の乗った船は、遣唐使である藤原清河の乗らない非遣唐使船として、大宰府に向かい、安倍仲麻呂は、そこに大式として派遣されていた親友の吉備真備を頼り、楊貴妃を預けた・・・筆者は、そのように推測する。

安倍仲麻呂は、当然、朝廷に事の次第を報告したであろう。しかし、政務のトップであった藤原仲麻呂は、それを信じなかったであろう。

『安倍仲麻呂死流傳輪廻物語』には、安倍仲麻呂が日本の朝廷から、唐の国に魂を売ったのだと言われていたとの話が載せられている。

結局、安倍仲麻呂の言動は、758年に小野田守が、大陸（渤海）に調査の為に送り込まれ、帰国して報告するまで信じ

られなかったであろう。

そして、安倍仲麻呂の伝えた唐の国の動乱情報が正しいと認められると、藤原清河の生存情報も認められ、759年に安倍仲麻呂は、高元度の船で、再び、唐の国に立ち戻る事となったと筆者は推測する。（「安倍仲麻呂の帰朝」が、「楊貴妃の亡命」に関わる出来事のため、歴史から抹消されたのだという推論については言うまでもないだろう）

むろん、以上の話は、全くの筆者の推測に過ぎない。しかし、安倍仲麻呂の755年の6月以降から、760年に左散騎常侍、鎮南都護（安南都護）に選ばれるまでの数年間、その動向は不明である。

杉本直治郎氏は、この間、安倍仲麻呂が玄宗に付き従って、蜀に逃れていたと推察していて、これが現在も、最も有力な説とされているが、玄宗の蜀行の記録の中に、安倍仲麻呂の名前はなく、これこそ、ただの根拠のない推論に過ぎない。

筆者の説には、『吉備大臣入唐伝説』の他、下記のような根拠がある。（他にも数々あるが、論考の進行上、書けない）

① 757年に大伴古麻呂等を首謀者とするクーデターの試み、いわゆる『橘奈良麻呂の変』が起こっていること（筆者は、このクーデターの試みは、唐の国の動乱情報を受けてのものであったと考える。大伴古麻呂は、先の遣唐副使であり、安倍仲麻呂をよく知る人物である。唐の国では楊貴妃の顔も見ている

であろう。必ず、阿倍仲麻呂の言葉を信じたに違いない。さらに、前章に述べたように、大江匡房は、『吉備大臣入唐伝説』を橘孝親が先祖から伝えられたものだとして記載しているが、橘孝親の先祖を吉備真備の時代まで遡れば、橘奈良麻呂に行き当たると考えられる。すなわち、橘奈良麻呂も、事の次第を把握していたと考えられる。

② 藤原清河、吉備真備や大伴古麻呂等と共に唐に渡り、留学生として唐の国に留まったはずの藤原刷雄の名が、764年の『惠美押勝の乱』の記録に記載されていること（藤原刷雄は、『安史の乱』が起こるとともに、留学を中断し、阿倍仲麻呂と共に船で日本へ帰国したのではなからうか）

③ 阿倍仲麻呂が760年に安南都護に就任し、実際、そこに赴任していること（阿倍仲麻呂が驩州かんしゅうに流された時、安南都護府と深い繋がりを持つようになったからこそ、阿倍仲麻呂は安南都護に任命されたと筆者は考える）

④ 779年5月26日の続日本紀、阿倍仲麻呂の死去が日本に伝えられた時の記録に「（阿倍仲麻呂の）家族が非常に貧しく、葬礼が充分に行えないため、東の絶百疋あひゃくと白の真綿三百屯とんを賜った」とあること（杉本直治郎氏は、これを当時、日本に来ていた唐使の孫興進等に預けたものだと解釈するが、阿倍仲麻呂が唐の国で亡くなったのは770年であり、今さら『779年』、葬儀のやり直しをするわけもない。しかも、阿倍仲麻呂は、その死にあたって、唐朝から潞州大都督を追贈されているの

であるから、葬式の費用を充分に出せなかったというのはおかしい。筆者は、阿倍仲麻呂が日本で結婚し家族をもうけていたと考える。唐に戻るにあたって、その家族は日本に残されたが、この時『779年』、初めて家族は阿倍仲麻呂の死を知らされ、葬儀を行おうとした。しかし、貧乏で葬儀の費用をまかなえなかったと解釈すべきであろう）

## 九 大江匡房と熊野信仰

再び、平安末期の大江匡房に話を戻そう。

その以前にも散発的に行われた事はあったものの、貴族たちの熊野参詣の本格的ブームは、白河法皇の時代に始まる。この白河法皇に仕え、思想的に大きな影響を与えていたのが大江匡房であった。

筆者は、『狐媚記』や『江談抄』の『吉備入唐の事』から、大江匡房は当時、楊貴妃の渡来説を再発見していて、これが、この後も続く貴族たちの熊野参詣ブームの本となったと考えている。

大江匡房が白河法皇に従って熊野に参詣する事はなかったと考えられている。しかし、大江匡房の存在は白河法皇の熊野信仰に影響を与えていた。

この事は馬 耀氏が『大江匡房における中国文化の受容と変

容…『本朝神仙伝』と中国の仙伝類を中心に』で指摘されている。

馬耀氏は、白河法皇の最初の熊野参詣である寛治四年（1090）の参詣について鎌倉時代初期に成立したと考えられている『熊野権現金剛蔵王宝殿造功日記』の『白河院熊野御参詣事』に次のように記述されている事を紹介されている。

「寛治四年正月十六日壬午、御精進。廿二日戊子御進発。道之間、十八日。二月十日、本宮付。十一日丙午、御奉幣。同十一日、大峯縁起、開御覧。読人僧隆明、依不見目不読、奉行人匡房読之。」

すなわち、寛治四年の白河法皇の熊野参詣の時、白河法皇は、本宮で『大峯縁起』をご覧になったが、この時、先達であった僧の隆明にはこれを読む事が出来ず、代わりに付き従ってきた大江匡房が読んだというのである。

大江匡房の熊野信仰への造詣の深さを感じさせる話である。この記述は、『中右記』など、他の資料には見られず、大江匡房が寛治四年の白河法皇の熊野参詣に付き従っていた事を含め、事実ではないとされている。

しかし、そうであっても、『熊野権現金剛蔵王宝殿造功日記』が鎌倉時代初期に成立している事を考えても、この時代の人々が、白河法皇の熊野参詣に大江匡房が影響を与えていたと考えていた事は間違いないであろう。（注・寛治四年に白河院

は、まだ、法皇ではなかったが、本論では、呼称を統一し法皇とした。）

## 結び

前回の論考で、筆者は「宇多法皇」「後白河法皇」の信仰が楊貴妃と結び付いている事を示した。今回の論考では、それに引き続き、「白河法皇」「鳥羽法皇」の信仰が楊貴妃と結び付いている事を示す事が出来た。さらに、吉備入唐伝説は安倍晴明伝説とも結び付いていた。安倍晴明と花山法皇との関係を考えるなら、楊貴妃は、「花山法皇」の信仰とも結び付いていると言えるだろう。

熊野信仰に取り憑かれていた上皇・法皇の中で、残るのは、「後鳥羽上皇」だが、「後鳥羽上皇」の治世は、前回の論考で述べた「藤原信西が楊貴妃の絵巻を作った」記録を残した九条兼実が摂政・関白を務めていた時代である。また、後鳥羽上皇の熊野御幸に同行した藤原定家は、『松浦宮物語』と言う小説を残している。『松浦宮物語』は、唐の国の戦乱を舞台に、運命に翻弄される唐の国の妃と日本から渡って来た遣唐使とのラブストーリーであるが、これは、楊貴妃と阿倍仲麻呂をモデルにしているであろう。「後鳥羽上皇」の時代も楊貴妃の信仰が熊野信仰と結び付いていたと言っていると思う。

これで、熊野を崇敬したほとんどの法皇・上皇と楊貴妃と

の結び付きを示す事が出来た。

さらに筆者は、白河法皇の時代に始まる熊野参詣ブームが、大江匡房の楊貴妃渡来説の再発見によるものである事を指摘した。

大江匡房は、白河法皇の父である後三条天皇にも仕え、この時、すでにその政治の中枢を構成していた。

後三条天皇は最初に伏見稲荷を参詣した天皇であると言われている。また輪王灌頂（皇帝を転輪聖王に位置づける密教による天皇の即位儀式）を行った最初の天皇だとも言われている。

この時、行なわれた輪王灌頂がどのようなものであったか、その実態は明らかではないが、後の輪王灌頂を参考に限り、それは、熊野権現や叱枳尼天（稲荷・狐）信仰と関連するものであっただろう。名古屋大学の阿部泰郎教授は、鎌倉初期の慈円の『夢相記』に、この後三条天皇が輪王灌頂を行ったとする記録を大江匡房によるものと紹介されている。

輪王灌頂は、その元をたどれば、真言八祖の一人、不空三蔵が、楊貴妃が亡くなった原因とされる「安史の乱」を調伏するために護国思想に基づいて行ったものとされる。不空は楊貴妃の夫である玄宗、肃宗、代宗の三帝の師とされていた。

後三条天皇の伏見稲荷参詣も輪王灌頂も、大江匡房の楊貴妃渡来説の影響を受けて行われたものだと考えられるだろう。

熊野信仰、稲荷信仰、密教は、楊貴妃信仰を媒として、密

接に絡み合っていたのである。

今回の論考はここまでで止めおく。

次回より、いよいよこの論考の本旨に入る。

## 補足

本論考は、筆者がamazonで出版している

「龍神楊貴妃伝 1 楊貴妃渡来は流言じゃすまない」

<http://www.amazon.co.jp/dp/4990960408/>

および、「龍神楊貴妃伝 2 これこそまさに楊貴妃後伝」

<https://www.amazon.co.jp/dp/4990960416/>

の一部を抜粋し、再編したものである。

今回、8章で、阿倍仲麻呂の動向について筆者の推論を述べたが、それより、馬嵬で姿を隠した後の楊貴妃の動向にこそ、興味を持たれるかもしれない。そのことについては、「龍神楊貴妃伝 2 これこそまさに楊貴妃後伝」に詳しく述べているので、興味を持たれた方は、ご一読願いたい。

## 注

(1) 山本 陽子

『切目王子像小考・熊野曼荼羅から一本ダタラまで』

明星大学研究紀要 日本文化学部・造形芸術学科 2004

鈴木正宗

『熊野の根源的力を探る（八、切目王子の位置付け）』

国際熊野学会「熊野学研究所―第7号―」

(2) 岡部明日香『日本における楊貴妃怪異説―台北故宮博物院

本『歌行詩』「長恨歌」書き込みからの考察―』

国際シンポジウム

「東アジア文化交流―妖異・怪異・変異―」

(3) 『中国古典小説選5』 黒田真美子訳 明治書院参考

(4) 静永健『白居易「任氏行」考』

九州大学学術情報リポジトリ

<https://ci.nii.ac.jp/naid/120000987803>

(5) 『千字文』

「弔民伐罪 周發殷湯」 李注 抜粹

召公は妲己の容姿が端麗で、ちよつと微笑むだけで数え切れないほどの美しさに満ちるのを見ると、殺すに忍びず、そのままにして一夜が明けた。太公が召公に言うことは、「紂が国を亡ぼし、家を喪つたのは、すべてこの女のためであります、この女を殺さずに、いったいいつまで待たれますか。」そこで妲己を剉確（押し切り、ギロチンの如きもの）にかけた。たちまち変じて九尾の狐狸となった。

「千字文」岩波文庫 小川環樹・本田章義注解より

※ただし、現存、最古の『注千字文』に、九尾の狐の話は載っておらず、後の世に加えられた可能性は否定できない。

黒田彰 「上野本『注千字文』」

関西大学学術リポジ

<http://hdl.handle.net/10112/5342>

(6) 王晓平 『願文にひそむ俗文学―江都督納言願文集』

を中心として―』

帝塚山大学人間文化学年報（平成17年・2005年）

<http://www.lib.tezukagu.ac.jp/kiyo/nTEZUKAYAMAGA>

[KUIN-UNI/n7PDF/n7Wang.pdf](http://www.kuin-ni.ac.jp/n7PDF/n7Wang.pdf)

(7) 『簠簋袖裡傳』 阪本龍門文庫善本電子画像集

<http://mahoroba.lib.narawu.ac.jp/y05/html/239/>

画像61～62・65～参照

(8) 藤巻一保 『安倍晴明』 学研

(9) 杉本直治郎 『阿倍仲麻呂傳研究』 勉誠出版

(10) 馬耀 『大江匡房における中国文化の受容と変容…『本朝神仙伝』と中国の仙伝類を中心に』

日本語と日本文学 第51号

筑波大学国語国文学会

<https://core.ac.uk/download/pdf/56652924.pdf>

(11) 大鏡には、安倍晴明が花山天皇の退位を予言し、それを止めようとした話がかかっている。

「大鏡」花山天皇の項 抜粹

文学55巻2009年3月

<http://hdl.handle.net/2237/12942>

(15) 苦米地 誠一 『真言密教における護国』

現代密教13号

<http://www.chisan.or.jp/files/user/pdfD/>

[gendaimikkyo/13pdf/11.pdf](http://www.chisan.or.jp/files/user/pdfD/gendaimikkyo/13pdf/11.pdf)

さて土御門門より、東ぎまにゐていだしまゐらせ給ふに、  
清明が家の前をわたらせ給へば、みづからの聲にて、手をおびたゞしくはたはたとうつなる、清明「帝おりさせ給ふと見ゆる天變ありつるが、既になりにつりとみゆるかな、参りて奏せむ、車に装束せよ」といふ聲をきかせ給ひけむ。さりとも、あはれにおぼしけむかし。清明「かつゝ式神一人内裏へまゐれ」と申しければ、目にはみえぬものゝ、戸をおしあけて、御うしろを見まゐらせけむ、式神「只今これよりすぎさせおはしますめり」と、いらへけるとかや。

- (12) 『松浦宮物語／無名草子』 日本古典文学40 小学館  
(13) 延久四年(1072)三月二十六日

後三条天皇による稲荷社行幸

旧記云く、後三条院春日社へ行幸、稲荷をのりうちありければ、稲荷大明神御述懐ありて、ちはやふる神の数にも入るならばまれの御幸をよそに見ましや

「稲荷社事実考証記」1789年

- (14) 阿部泰郎

『中世思想文献の研究(三)―架蔵「輪王灌頂口伝」翻印と解題』

名古屋大学文学部研究論集